
末広直道氏・裕子氏（藤平陶芸有限会社）からのヒアリング

- 日 時：平成 26 年 8 月 30 日(土)
- 場 所：京都市立開晴小中学校会議室
- 出席者：中ノ堂一信（京都造形芸術大学・大学院客員教授）
木立雅朗（立命館大学文学部教授）
清水愛子（京都工芸繊維大学文化教育研究センター特任准教授）
前崎信也（立命館大学衣笠総合研究機構専門研究員）
土田真紀（同志社大学文学部嘱託講師）

当時、女性は窯場にはあまり近づかず、窯場に行くのは夜食を届ける時ぐらいであった。昭和 14 年生まれ(裕子様)で、始めは今の五条に住んでいた。和風の 2 件続きの家であった。その後、大家族になり藤平家は松原通の東大路を東に入ったところに住むようになり、父（藤平長一）はそこから窯場まで通っていた。しかし、祖父（藤平政一）は陶製会社になったときから登り窯がある敷地内を住まいとしていて、食事だけは藤平家の自宅に来て食事をしていた。

五条通の家は、荷造り場と仕入業者への売場になっていた。京都の間屋とはあまり取引がなかったもので、北海道から沖縄まで日本全国に売りに行っていた。商品の写真を見せると買ってもらえた。食器などでは勝負にならなかったもので、できるだけ大きなものとして、戦前は火鉢、戦後は花瓶を主に作っていた。民芸的なものから、電気物と言って、電柱に装着されているガイシや、島津製作所や日新電機向けの商品を扱っていた。電気コンロなども作っていた。戦前にはアメリカへの輸出品も作っていた。また、青いペルシャブルーの大きな花瓶を作っていた。子供の頃に五条の店に並んでいた花瓶は大きいものであった。戦争末期には手榴弾や秋水という飛行機用の特別の装置を作っていた。

父は河井武一さんと親友で親しくしていた。河井武一さんは河井寛次郎さんの甥である。戦争中の社員名簿には河井寛次郎さんや河井武一さんのものがある。河井寛次郎さんは初代社長と同じ給料をもらっていた、河井武一さんはそれよりは少し少なかった。河井武一さんが戦後にいたときに民芸陶器をたくさん焼いていた。民芸陶器を焼いてよく売れた時期があり、大和民芸店や東京などに卸していた。だんだん売れなくなり別のものに変わっていった。昔は 30 個、20 個単位で売っていた。民芸陶器のときは湯呑、灰皿、お皿、特に丸いだるまの形をした湯呑がよくあった。藤平の押印をしながら民芸陶器を作っていた。その他にも種類は多かった。祖父(長一・初代社長)は河井寛次郎さんの指導を受けていた。河井武一さんは河井寛次郎さんの窯にも関わっておられた。戦後に河井寛次郎さんが工場に来られていたかどうかはわからない。河井武一さんは、民芸陶器が下火になったときから来られなくなったのではないかと感じた。民芸陶器が売れなくなったときには花瓶を主に作っていた。たち吉さんとかが窯をあけたときに買いにこられていた。登り窯の部屋ごと、中のものを買っていかれた。たち吉さんはよく買いに来られていた。進駐軍ものは作っていなかった。

ご飯を食べているときには、真ん中に祖父がいて、その傍に父や藤平伸先生がいて、焼く際の温度がどうだったとかなど、窯の話ばかりしていた。子供は横のテーブルで祖父等の話を聞きながらおとなしく食べていた。祖父は一人で工房の一番隅でいろいろな釉薬を絶えず研究していた。最後

の方で朱色の「朱紅」を見つけ出した。父の妹の嫁ぎ先の里見さんに朱を教えた。今もその息子さん
が扱っている。祖父は河井寛次郎さんとも釉薬の話をしていたと思う。藤平家は釉薬の研究を大
事にしてきた。馬町に工場があったときも、祖父は河井寛次郎さんのところに行って教えてもらっ
ていた。馬町は作業場だけで窯がなく河井寛次郎さんの窯を借りていた。

戦後、昭和 30 年代から、京都の焼き物は新築等のお祝いの贈答品として売れていた。建物が洋
風になり、京風、民芸風なものが合わなくなってきた。その後、産業研究所が試作したものや日展
系の方の大きな作品が作られたのではないかと。地方の民芸陶器に値段で太刀打ちできなくなっ
ていった。

登り窯の焼成時には、夜中、祖父は窯の傍に御座を敷いて寝ころんで仮眠しながら、薪をもつと
入れるようになどの指図をしていたと聞いている。窯をたいているときはみんな窯の傍にいた。ガ
ス窯になってもその習慣は残っていた。登り窯では焼成時に、およそ 2000 束の薪を焼いていた。
当時はこのあたりに 20 近くの登り窯があり、毎日のようにどこかの窯が煙を出していた。そして
薪が足りなくなるとともに、公害防止条例の規制が厳しくなり苦情がものすごく、発達してきた電
気窯が変わっていった。昔は黒い煙が家の中に入ってきた。おひつの中のご飯に黒いすすが付き、
洗濯物にも黒いすすが付いていた。近所の方々は、冷房の無い時代に障子を閉めて過ごされていた。
登り窯を焼く前には近所をまわってお願いしていたと聞いている。お風呂屋さんがあって、その日
のことをみんな話をするのが習慣であった。専門の窯炊きさんが 2~4 人こられて 3 の間まで焼
きあがったら、お隣の窯に移って行かれた。社員は 4 の間から焼いていた。還元が必要な辰砂しんしゃとか
は 1 の窯で焼いていた。下の方の温度の高い部屋では灰皿のような磁器を焼いていた。上の方は素
焼きを焼いていた。藤平家は戦争が始まった頃にここに移ってきた。そのときは 10 社くらいでこ
の登り窯を使っていた。藤平家以外の登り窯は個人の方にも貸し窯制度として貸していた。昭和 20
年 4 月に安田さんから藤平家が購入してからも、貸し釜をせずに自社単独で焼いていた。焼くもの
が大きかったからである。

最初、会社合同になったときの出資はお金ではなく轆轤などの道具で提供されていた。戦後藤平
家だけが使うようになったときの資料等はない。その当時のことを知っている方は皆さん亡くなら
れた。戦争が終わって合資会社は解散した。最大時は 60 人ぐらいが働いていた。最盛期は皆が並
んで轆轤をしていた、どんどん作らないと間に合わなかった。土は信楽の土を雲林院さんから購入
していた。登り窯を焼成していた頃は分業していた。小室さんは、窯炊きさんとして来ていただ
いていた。薪は向日町の会社が持ってきていた。薪を割るのは窯炊きさんに同行されていた専門の方
が割っていたのではないかと。窯が傷んできたら、部屋ごとに一部屋ずつ直してきた。レンガを火の
当たる方にひっくり返したりしていた。それは専門家の方にしてもらっていた。

窯の周りは多くの在庫が山のように積んであったが、京都市に売却するまで、それらの在庫を移
動しそこで、登り窯の保存運動が行われた。平成 10 年秋頃に登り窯の撮影会があり、その写真の
コンテストをした。出来上がった写真の展示会を五条の店でした。そのときに木立先生がご覧にな
った。その後、いろいろな方が登り窯を見に来られるようになった。それまでは一般にはあそこに
登り窯があることは知られていなかった。子供たちが見学に来て登り窯を見ると感動していた。ス
ミソニアン博物館学芸員のルイーゾコートさんも見に来られすごく感動されていた。人が見てくだ
さると窯が喜んでるように思う。今の雰囲気がいままで残ってほしい。